



陶町歴史ロマン 9

7、陶窯業の発祥

(1)市内窯業発祥の地 陶

瑞浪商工会議所資料によると、「市内窯業の発祥の地、陶地区は、室町時代の文明 6 年（1474 年）、武蔵之国久良岐郡（横浜市）出身で代々相馬焼を業としていた加藤左衛門尉景信が陶町大川に移住して大川窯を築いたのを起源としている。」とありますので相馬焼を調べてみましたが、いわゆる相馬焼（福島県相馬市）の創始の年代については慶安（けいあん）初年（1648 年頃）とのことです。福島の相馬焼とは関係ないみたいです。（走馬（そうま）柄が得意だったとか？）

ただ、加藤左衛門尉景信は若き頃、窯修行の旅の途中で大川の地を訪れ、その 40 年後の晩年に大川へ移住したとのことです。よほど大川が窯業適切地（土、水、薪プラス？）だったのでしょう。「陶町の古窯」を記された河野幸九郎さんは、「プラスアルファは、鎮守の産土神が彼の故郷と同じ富士浅間であることが強く彼の心を動かしたのでは？」と記されていますが、浅間神社は江戸時代の初期に加藤景信の子孫が、先祖の故郷である関東で見る双耳峰の山によく似ている山の頂きに、富士山信仰の浅間神社を建立した、という説が一般的であるようだが…。

この後、1500 年頃から、瀬戸の陶工は、政治の安定・保護（尾張はまだ信長による統一前で戦乱を逃れて、また美濃では斎藤道三が商工業振興を図っていた。）を求めて東濃へ移動するのですから、景信は凄い先見の明があったことになるかと思えます。

① 大川窯

大川窯は景信を初代とし、戦国末期の四代景慶の時に「与左佐」として志野、織部、天目黄瀬戸系の鉢類、壺類、皿、茶碗の日常品をも焼かれ全盛期を迎え、天正二年（1574 年）には織田信長の朱印状を得ています。その後、名前も羽柴与左衛門に変えて安土桃山文化の一翼を担いました。

大川窯は東窯と西窯があり、大きいのは東窯の方で東窯川上流の山に位置し 40 基くらいあったと確認されています。当時の窯は 1 回の焼成で使用済みが多かったようですが、それにしても相当な数です。西窯の方

は現在の丸大製陶所の辺りにあったようです。こちらは試験的な窯であったようです。

小里の興徳寺には羽柴与左衛門景慶作の茶壺が現存しています。

江戸時代の登窯で焼成された作品として大きさ、質の面ですぐれた壺のであります。底に大川村、与左衛門の刻銘と「くるみ印」があります。



灰釉印花楡描文大鉢
16世紀(桃山期)
大川窯

与左衛門の茶壺



② 水上向窯と猿爪窯

またこの大川窯より、90年後の永禄6年（1563年）に尾張国瀬戸より加藤万右衛門尉基範が陶町水上にきて水上向窯を創業し、ついでその子、仁右衛門尉景貞が天正6年（1578年）土岐の久尻より移住し猿爪釜ヶ洞に築窯した。



水上向窯は水上南部の山に位置し、大川窯に匹敵するくらいの相当な広さがあります。大川窯同様に志野、天目、織部、黄瀬戸の破片が出土しています。

加藤万右衛門尉基範は、瀬戸の品野を通過して水上村及び陶を通過して信州へ通じる街道（この時には、まだ中馬街道の名はない）の整備も基範達陶工がしたようである。

この街道によって、陶に三州広見石など長石の搬入、製品の尾張方向への搬出が可能になり、後の田尻窯と併せて、水上志野の隆盛につながったと思われます。

なお、猿爪窯は通称モロヤの奥にあったといいますが、現在その地はほぼ原野で窯跡を確認することはできません。規模も小さく試験的な窯であったようである。景貞の長子は大平窯に移ったようですが、子の一部は猿爪に残り帰農し、その末裔が丸カ製陶所の加藤豊資さんである。（豊資さんの子孫は名古屋へ移住）



猿爪窯の陶祖「景貞」を祀る神社
加藤の氏神として祀っている。



③ 水上田尻窯

それより約 20 年を経て久々利、大平村の加藤太郎右衛門景里（景豊 5 男）は、慶長 7 年（1602 年）水上の地に田尻窯を開きました。

大平の加藤五郎左衛門景豊には十男一女があり、景里以外にも長男 新右衛門景得 慶長 9 年（1604 年）に水上村に移り十九年に品野村へ移る。

三男 三右衛門景勝 新右衛門と水上村に移り、後に品野村に移る。

と、ありますから 3 人が水上に来たこととなります。もっとも他の二人はその後に品野に移っていますから、残ったのは景里一人ということとなります。

水上向窯同様に志野を中心にしてかなりの規模で窯業をしていたようです。



猿爪桜ヶ丘公園には、大川窯の加藤左衛門尉景信、水上向窯の加藤右右衛門尉基範、猿爪窯の加藤仁右衛門尉景貞、水上田尻窯の加藤太郎右衛門景里の 4 人を祀った陶祖碑があり、毎年 8 月 13 日に恵那陶磁器工業組合により陶祖祭が催されています。

(2)陶の地の適性

上記のように、室町より江戸時代にかけての東美濃における美濃焼発祥の地としての大川窯、水上向窯、猿爪窯、田尻窯が、私たちの町に相次いで開窯しました。但し、開窯の祖はすべて私たちの町以外の方たちです。昔も今も町おこし・村おこしには「よそ者・若者・ばか者が大事」というのは変わらないようです。それはさておき、つまりは優れた陶工達に陶の地が選ばれた、他の地より優れていた点があったということです。どんな点が優れていたのでしょうか。

小里川水系で粘土が出土する。山があって原料となる薪が容易に手に入る。山があって窯を築く（当時の大窯は頂上付近で傾斜を利用）ことができる。水が近くにある。などが考えられますが、私には、これらの点は特に陶の地が優れていたとは思えません。粘土が出て、山があって、水がある地は他にもありそうです。やはり、当時まだ整備不十分ではあったが、後に中馬街道と名付けられる街道の存在が大きかったのではと思います。この街道により、原材料の搬入、尾張・三河への製品の搬出が比較的容易なこと、窯業先進地の瀬戸が非常に近いことが挙げられるかと思えます。それと、末期とはいえ戦国の世ですから戦禍に巻き込まれない地（山の中）というのも有力だと思います。

あるいは、この地方では花崗岩の風化した藻珪（そうけい）と呼ばれる土が出土するが、これを陶土に加えることによってできる作品に魅力があったのかもしれない。陶器に全くの素人の私の当てずっぽうの説ですが…。

(3)羽柴与左衛門

もうひとつ疑問があります。**大川窯四代目 加藤景慶はなぜ姓を羽柴に変えたのでしょうか。**羽柴という苗字の創始者は羽柴秀吉のはずです。秀吉が羽柴を名乗るのは、木下から改姓する際、織田信長家臣先輩の丹羽長秀の羽と柴田勝家の柴から各一字を賜り「羽柴」と名乗ったとされています(1573年)。したがって、羽柴の姓は信長より朱印状(1574年)とともに賜ったという説はどうか？と思います。

羽柴姓は、後に天下人となる天下の羽柴姓ですから簡単には名乗れなかったと思います。

秀吉は羽柴姓を臣下の数人に与えています。その中に織田重信という人物がいます。重信は織田信長の嫡男織田信忠の子です。秀吉は信長の死後、清州会議で自分を後見人にして幼い三法師を織田家の相続人とした話には有名かと思いますが、その三法師が重信です。

重信は天正20年(1592年)13歳で美濃国岐阜13万石の主となります。そして秀吉の朝鮮出兵(1593年 文禄の役)に伴い渡海します。その時、重信の家臣が高麗茶碗の最高峰「井戸茶碗」を持ち帰ります。重信はこれを秀吉に献上すると、秀吉より羽柴姓を賜り、岐阜中納言の官位も授かりました。信長より「朱印状」をたまわる程の景慶ですから、織田家とは信長死後も親交があり、陶工景慶は羽柴重信より羽柴姓を許されたのではと思います。

景慶にしても、その頃は**大川窯**が与左焼きとして隆盛した頃ですから他の窯と差別化する必要があったのかもしれませんが。この頃の陶地区の窯はすべて加藤姓で、大川窯以外は近隣からの移動者ですから、「自分の祖先は武蔵国の出身で遠く離れた美濃の地で、羽柴秀吉公同様に一旗あげるぞ。」と主張したかったのかもしれませんが。



(4)陶窯業の衰退

こうして始まった陶地区の窯業ですが、江戸時代に入ると次第に衰退してしまいます。

桃山から江戸時代にかけて他の追従を許さず、一気に隆盛をきわめた千利休、古田織部好みの美濃の茶陶は、後を継いだ小堀遠州のわび、さびの提唱により京都の楽、仁清、乾山のきれいにまとまった遠州好みにその座を譲らざる得なくなりました。

美濃焼全体が冬の時代を迎えることになりました。実際、陶のみならず多くの窯が廃業しました。美濃焼はそれまで武士を相手にさばいていましたが、庶民一般相手に転換せざるをえません。こうなると、価格の勝負になりますから陶の山奥では物流の面での不利は否めません。結果、江戸末期まで陶の地に窯の火は消えてしまいました。

また、江戸幕府の質素儉約の政策も陶の地から窯業を衰退させた一因かもしれません。というのは、この頃の陶の窯業作品はどちらかという陶芸の世界で、贅沢扱いされたのではと思います。また、当時の窯業は農業中心の生活の中で年に数回窯を焼くという窯業だった訳ですが、当時の権力者が百姓心得等により百姓に専念させたかもしれません。

こうみてくると、平成の陶の窯業の状況と重なるような気がします。隆盛を誇った陶の窯業を支えたのは輸出陶磁器でした。「平物の陶」と呼ばれたように、特に白さが売り物で安価で質の良い陶の皿ものはアメリカを中心にディナーセットとして受け入れられ昭和40年頃がピークでした。

ところが、ディナーセットは生活様式の変化により、各家庭には必ずしも必要な品ではなくなってきましたし、また「白いもの」とは限らなくなって需要は減少してしまいました。更に中国をはじめ東南アジアを中心とした新興国が、日本の製品より更に安い陶磁器を供給し始めると、アメリカ内での価格競争に陶の陶磁器は勝てず、減少傾向をたどったのです。価格競争では、陶の地は山奥で大量輸送の鉄道もない、大きなトラックが走る道もないでコスト高になり、安価な労働力があっても勝てないのです。

江戸期の衰退は曾根庄兵衛の登場により再興したのですが、はたして平成の曾根庄兵衛は現れるのでしょうか。

(5)美濃焼の再興

江戸時代に入り、美濃焼は冬の時代でしたが、江戸中期になると再び息を吹き返します。

それまで有田焼、備前焼などに押されていた美濃焼ですが、江戸が大消費地になるにつれ、江戸からの近さを武器に攻勢をかけたのです。実際、当時は牛馬による輸送で宿駅毎に積み替え作業があり、割れてしまうリスクは大きかったと思います。

文化・文政（1804～1829）の時代になると、美濃（多治見・土岐）でも磁器生産が始まります。有田の磁器生産に遅れること約 200 年です。長石を混ぜる砂婆、層珪、蛙目粘土、木節粘土などを調合し、焼成すれば有田よりも透光性を持った坏土（長石質磁器）が作られました。そして、人口を増す江戸を市場にすることによりかなり繁盛したようです。

しかしながら、陶の窯はこの流れに乗ることはできず、窯株（窯焼きの権利）は有りながら休眠状態が続きます。水上・大川には、窯株が 4 株ありましたが持ち腐れ状態です。所有していれば租税がかかります。4 株分で米 4 俵、銀 50 匁の記録があります。さらに小里領から天領になると冥加金もあったようです。そこで株を有償で貸し出すことになりました。1841 年には小里の和田亀右衛門、和田幸右衛門に 1844 年には土岐郡窯方惣代の笠原の宇平に、多治見庄屋の加藤円治、滝呂の庄屋の徳右衛門に貸し出されました。こうして窯株は東濃西部の地域に押さえられてしまいました。

このことが後に陶の実質的陶祖とされる曾根庄兵衛が起業する際、大きな障害になります。窯株のない状態で窯焼きをはじめたのですから。